

死者35人 35muertos

タイトル：死者35人 35muertos
著者：セルヒオ・アルバレス Sergio Álvarez
出版社：アルファグアラ Alfaguara
出版年：2011年
ページ数：512頁
言語：スペイン語
読者対象：一般
レポート作成：高際裕哉

概要

歴史小説、冒険小説、私小説、スリラー、それにロマンス小説の要素まで盛り込んで書かれた本書は、ある敗残者を襲った不幸の数々と、かつて彼を見知っていた何十人もの人々の物語を通じて、ここ35年間のコロンビアを描き出す。闘争に敗れた革命家、マチスモを標榜するゲリラたち、怒りに駆られて徒党を組む者、ボレロの得意な民兵たち、愛人に裏切られた麻薬の売人、極寒の地をめざした亡命者、行方不明者、お祭り騒ぎに明け暮れる恵まれた人々に至るまで、さまざまな人間がうごめくこの小説は、どのページも活力と悲劇がたぎり、それらがつねに絡みあってコロンビアの残酷な歴史を紡いでいく。めくるめく語り口に彩られたこの小説は、間違いなく新しいラテンアメリカ文学を代表する一作となるだろう。

主な登場人物

「ぼく」：主な語り手。1965年、ボゴタ生まれ
ポトネス：324人も人間を殺した殺し屋。政府軍の殺害作戦により死亡
クリスティーナ：「ぼく」の母親の妹で「ぼく」の養母
ナタリア：ぼくの最初の本気の恋人
カミラ：ぼくの妻。ナタリアの妹

内容・あらすじ

物語の主な舞台となるのは1965年から2000年の末、20世紀の終わりに至るまでのコロンビアである。軸となるのは1965年に生まれた「ぼく」の語り。主人公の成長に併せて時系列にそって進む。その形式を生かしつつ、丁寧な時代考証と取材を元に作り上げられた物語であり、ある時代とその雰囲気表現するさまざまな手法が試みられている。

1960年代のコロンビアでは古くからの寡頭支配層が幅を利かせていたが、そのような国内構造を打破しようと複数のグループが軍事活動をはじめ。1970年代以降は麻薬マフィア、ゲリラ組織、極右パラミリタールなど複数の武力組織が台頭して警察や軍隊と衝突し、ありとあらゆる犯罪や暴力がはびこる時代へ突入していく。そういった同国の現実を存分に盛り込んだ物語である。

この小説の語り方は以下のような形をとる。「ぼく」の1人称による語りの節がひとつ終わると、次の節には別の人物による別の1人称の視点からの物語が挿入される。それが終わると再び「ぼく」の語りへと戻る。その意味で、この小説は「ぼく」を中心とした長編小説であり、数多くの人々が語る短編小説集でもある。「ぼく」を中心とした語りには以下のように進む。

*

大盗賊で大量殺人者のポトネスは1965年に殺害された。しかし、彼の死後もなお、ポトネスが生んだ死の連鎖は途絶えることがなかった。僕の母を奪ったからだ。母の婚約者だった男がポトネスに殺され、悲嘆にくれた母はぼくの父親のもとをたずね、淋しさに身を任せて関係を持った。そのとき、ぼくが母のお腹に宿ったのだった。ぼくを出産した際、母は病に苦しめられ、ぼくを産むなりあの世へ旅立ってしまった。母も、ぼくの人生もポトネスに呪われている。

母が死んで父は悲嘆にくれて酒に溺れ、とうとう警察の厄介になり、兄弟に助けを求めた。父はボゴタの街を離れ、ぼくを連れて兄弟が住む金鉱の町バルバコアスに行く。そこで甦ったように仕事を始め、事業が軌道に乗り始めるも、父は政治に手を出す。その地方の名家の上院議員を巻き込んで、金鉱を変えようとしたのだ。父は上院議員にそそのかされて不正選挙に手をそめる。町々を回り、投票箱の票を燃やして丸ごと票を入れ替える作業だ。しかし、上院議員は父を利用しただけで、父の要求には応じなかった。町で裏切り者扱いされた父は、まともや酒に溺れ、ひどく酔ったある日、崖から落ちて死んでしまう。

ぼくはしばらくは叔父のところに住んでいたが、ある日、母親の妹クリスティーナがぼくを迎えに来た。ボゴタで小学校の教員をしていたので、ぼくはその学校に通った。彼女はまだ若く、ある日を境に左翼活動に身を投じるこ

とになる。クリスティーナはぼくにとてもよくしてくれたし、また、ぼくは叔母の活動の仲間が好きだった。彼らはとうとうコミュニンを作ると言い出し、叔母はその仲間に加わった。みんなで中古の家を買い取って、そこに住み始めた。叔母は自分の持つ官能性に目覚め、仲間の男たちを次々と手玉に取った。

しばらくすると悪い噂が流れ、ひとり、ふたりとコミュニンの仲間が消えていった。軍や警察に連行されたのだ。殺された者もいた。コミュニンの仲間の中にスパイがいて、ぼくたちを崩壊させようと企んでいたのだ。そのスパイとは、叔母が本当に恋をした相手だった。スパイは身元がばれて、仲間に見つかり殺された。その後、叔母は人が変わったようになり、悲嘆にくれる姿しか見られなくなった。活動仲間も散り散りになってしまう。

1980年、ぼくは学校生活を再開する。街の不良とも仲良くなる。通りでマリファナとビールをひっかけてあれこれ話し、時々街へ出て泥棒行為をしたり、ディスコで騒いだりした。ぼくらの話題は女の子をいかに口説き落とし、関係を持つかということだった。仲間たちは近所のめばしい女の子に片っ端から手をつけるという具合だった。そんな折、ぼくはとうとう本気の恋に落ちた。相手は近所に住む娘だった。

仲間の助けの甲斐あって、ぼくは厳しい家柄の娘ナタリアと恋人になった。学校公認の大きなパーティーの日、ぼくたちは別の地区の連中と喧嘩騒ぎを起こした。パーティーは台無しになったけれど、ナタリアは殴り合いを続けるぼくを連れ出してくれた。その後、ナタリアとぼくは学校の倉庫で結ばれた。彼女の両親はぼくを受け入れてくれたし、ぼくは彼女に尽くすために真面目になって、仲間ともつるまなくなったが、しばらくすると飽きてしまった。退屈のあまり通りへ出て、仲間たちに声をかけたある日のこと、連中の強盗作戦に巻き込まれてしまう。

一方で恋人ナタリアはぼくを裏切った。ペピーノという別の地区の不良と懇ろになっていたのだ。ぼくは叔母の気持ちがよくわかった。ナタリアに別れを告げ、ぼくは仲間と麻薬売買にかかわることになった。しかし買い手に騙され、撃ち合いになって5人の仲間のうちひとりが死んで、もうひとりは身体に障害を負ってしまった。その事件の後、数日たってぼくが家に帰ると、叔母はいなくなっていた。昔の活動仲間にも調べてもらおうと、叔母はかつての同志の男と酒を飲み、その後、車に轢かれて死んだという。

ぼくは国立大学に裏口入学した。哲学を専攻し、大学生生活を楽しんだ。何人かの女の子とも関係を持った。アンヘラという女の子にそそのかされて、ここでも左翼活動に巻き込まれる。しかし叔母の活動グループとは異なり、どこか胡散臭かった。識字教育活動をやっているのはよいものの、活動資金は麻薬売買から得ていて、その金を武器の購入にあてていた。やがて大学の空気が不穏になってきて学生を殺しにかかるMAJIというグループも出てきた。アンヘラとぼくはこれ以上危ない目に遭わないよう、アジトにあったコカインを捨てたが、おかげで仲間に見つかり殺されそうになる。

ぼくは軍隊に入隊した。そこでの生活は悪くなかったし、街に出て行ったとき長い間探していたアンヘラと出会うこともできた。しかしふたりが所属していた活動団体が最高裁判所を占拠したというニュースが流れる。ぼくの所属する部隊は、事件の事後処理のために送られた。軍が徹底的な攻勢をかけた後、その現場に立ち入った。死臭で部隊の皆が吐いた。死体の山の中で、アンヘラが生き残っているのを見つけた。

ぼくは軍隊から抜け、様々ななりゆきの末にナタリアの姉妹のカミラと結婚してしまう。そして女の子が生まれた。カミラの父親は会計士として大きな仕事をしているということだったが、偽造小切手作りに関わっていた。そのせいでぼくは逮捕され、しばらく刑務所に入れられた。その刑務所で幼なじみのキケとばったり会う。刑務所でのキケには子分がたくさんいた。権力者のようだった。キケはパラミタールに入って農村部で無差別殺人を行っていた。

ぼくは刑務所から出るとすぐさま妻のカミラと娘を探したが、見つかったのは妻の姉のナタリアだけ。父親が政治的な仕事を依頼され、家族は散り散りになって逃げたという。互いの居場所も知らない。ぼくは家族を失ってしまった。その後、キケの誘いでぼくはパラミタールに入るが、反共主義に納得がいかない。ある日、ボゴタにいるぼくに暗殺指令が下った。小さいときから世話になったコミュニンの仲間メモを殺せという。メモを目の前にして銃を撃とうとしたが失敗し、ぼくは逃げる。書類と航空券を偽造して、海外に逃亡した。

妻のカミラや子供を置いて、ぼくはマドリッドへと逃亡する。そこでマリア・パウラという若いコロンビア人女性と知り合い、親密な関係になった。しかし彼女はパリへ旅立ってしまう。麻薬売買に手を染めていた知り合いのコロンビア人元警察官も、自分の身に危険が及ぶことを恐れスペインからいなくなる。その男のとばっちりを食って、ぼくはコロンビアの麻薬組織に襲われる。意識も絶え絶えになる中、その組織のひとりがボトネスの私生児だったことを知る。半殺しの目にあっただけで、スペインに着いてずっと考えていた自殺を実行しようとする。しかし結局、バルへ行く。2000年のクリスマスの日。隣でひとり飲んでいる男と言葉を交わす。クリスマスおめでとう、新しい世紀おめでとう、と男は言った。ぼくは生き延びてしまった。ボトネスが全ての悪を持って行って来ていますようにと願った。

所感・評価

本書は、時代状況だけでなく、小説というジャンルを強く意識した作品である。すなわち、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』（初版の出版は1967年）以降のコロンビアで、どのように物語を紡いでいけるのか、という問いへの野心的な挑戦であるといえる。

物語の冒頭に出てくるボトネスという盗賊の死は、『百年の孤独』の物語の核となったコロンビアのビオレンシア、「暴力の時代」と呼ばれる時代の一応の終焉を象徴し、ボトネスの死に呪われた「ぼく」の人生に、その「暴力の時代」が乗り移り、新たな暴力の時代が始まることを示唆している。

とはいえ、ラテンアメリカ文学・映画等のお家芸とステレオタイプ化されつつある、いわゆるマジック・リアリズム流の文体を期待して本書を手にとると、見事に裏切られる。

文体は極めて簡潔である。コロンビアの口語表現さえ把握できれば非常にわかりやすい。各節には1人称の語り手が設定され、語り手の周辺を、直接話法で表現される会話が取り巻く。ある視点がカメラとなり、その目の前で展開される会話や登場人物たちの台詞は、映画かテレビドラマを見ているかのような。この意図的ともとれる通俗性に、前衛性や実験性からあえて一步距離をとった工夫を読み取ることができる。この読みやすさも、本書の魅力の一つである。

また、「ぼく」の語りと交互に挿入されるエピソードは、「ぼく」と同じ時代を生きる、複数の語り手が語る物語である。「ぼく」の物語と重なる場合もあれば、関係ない場合もある。それらの断章も丹念に練り上げられており、それらを短編小説として読むこともできる。この小説は「ぼく」とその周りをめぐる長編小説でもあり、多くの人物の視点から語られる短編小説集でもある。

各節の冒頭には、スペイン語圏アメリカ各地の雑多なジャンルのポピュラー・ソングの歌詞が引用され、それらの歌の題名・歌手は、巻末に付された曲目リストに記載されている。時代性を刻印するためのインデックスであると同時に、作者の真面目な遊びでもある。日本でも既に知られているファニア・レーベルのサルサやヌエバ・カンシオンがそこかしこに響いているし、パジェナートが流れてきたりもする。少しでもスペイン語圏の音楽に触れたことのある人間なら、聴いたことのある歌手が必ず出てくるはずだ。

この小説で引用されるほとんどの楽曲には、ウェブを通じてアクセスできる。近年、日本でもスペイン語圏アメリカ音楽の優れた紹介書が複数出版されており、この作品に響く音を味わうための条件は揃っている。一見映画かドラマのサウンドトラックのようにも思えるが、歌詞を引用することで、物語に音楽を吹き込み、響かせ、意味を重層化する目論見は、実は現代の文字メディアにしか取れない技法である。

本作品の構造は明解である。多様な声は響いているものの、節ごとによく整理されており、各節の起承転結も端正である。また、大衆的な要素を積極的に取り入れてもいる。例えば暴力描写、性描写、コロンビアの街場の言語やポピュラー音楽等。シナリオ・ライター的な物語作りなのかもしれない。しかし、この作品はただの娯楽作品ではない。本作品は、物語が備えている、出来事や人間を想像させる力というものを存分に生かしている。時代や社会背景を横糸に、物語とそこに出てくる登場人物たちが縦糸を紡ぐ。コロンビアの時代や社会の圧倒的な暴力的状況を背景に展開するこの物語はリアリティに満ち、その下でどんな人がどのように生きたかを想像させる。

近年紹介量が再び増えつつあるラテンアメリカ作家たちとの差異をどう図るのだが、いずれにしても本書は物語で読ませる作品であり、対象となる読者層は比較的広いはずだ。海外文学に興味のある読者のみならず、ラテンアメリカ情勢に興味のある読者や、ポピュラー・カルチャーに興味を持つ読者にはアピールできる点があるのではないだろうか。

翻訳に際してはコロンビアの口語表現が多用されているため注意したい。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/35-35muertos>